

ハーネンカムレース - キッツビューエル 2010

アルペンスキーワールドカップのハイライト的イベント

どのスポーツにもメインイベントとなるものがあり、キッツビューエルのハーネンカムレースなしのアルペンスキーワールドカップは考えられない。今年のハーネンカムレースは第70回を迎え、1月22～24日に開催される。この週末には3種目（スーパーG、滑降、回転）が行われるが、土曜日の滑降こそが今季のスキー競技最高のハイライトであり、全てのスキーレーサーたちが勝ちたいと願うレースである。

滑降コースは、海拔1,655mからスタートし、全長3,312m、標高差860mを、時速150kmに達するスピードでかけ下る。スタートから2分足らずで、選手たちは観客でいっぱいのゴールエリアに達する。このハーネンカムレースには、こうした数字だけでなく、世界最高のスペクタクルもある。それが、滑降コースのなかで最も難しく、最高の滑りが求められるスロープと言われる「シュトライフ」である。ワールドカップのなかで最も恐ろしく最も難しいスロープを滑り降りるこの競技を、最も単純明快に表現したフレーズがある。それが「ザ・レース」である。

独特のオーラすら放つハーネンカムレースは、世界中40以上のテレビ局で放送され、スキー競技の認知度が少ない国々でも放映されるほど。テニスのウィンブルドン、F1のモナコと同様に、スキーレース競技にとってキッツビューエルは比類なき特別な場所として称えられている。

ロレックスはこの比類なきイベントの最大のサポーターである。このスイス時計メーカーの名前は、80年以上にわたって最高のスポーツと最高のアートと同義語とされてきている。アルペンスキーワールドカップの創成期よりスキーレースを支援しているロレックスは、スポンサーを超えた、真のパートナーであり続けている。このハーネンカムレースのイメージは、シュトライフを通過する選手たちの姿に象徴される。それは、正確さ、エレガンス、信頼性。そして、それらをもっとシンプルに表現すれば、それはパーフェクション（完璧さ）となる。

ロレックスは、2007年よりハーネンカムレースの公式タイムキーパーを務めている。



ザ・ベスト・オブ・ザ・ベスト — 最高の選手が競う

ワールドカップ滑降のなかで最も難しいスロープを征するのは、世界最高の選手だけ。シュトライフの名は、経験の浅いスキーヤーに畏れと戦慄さえ呼び起こす。そして、ここを征したウィナーたち、キリー、ザイラー、シュランツ、コロンバン、クラマー、リード、ツルブリッゲン、ハインツァー、オーモット、シュトロプル、マイヤー、エーベルハルター、ヴァルヒホファー、ラルヴス、キュッシュ、昨年のデファーゴ。その名は、スキーレースの紳士録のようだ。

このウィナーたちのなかには、まさに抜きでたスキーヤーがいる。ピルミン・ツルブリッゲンはアルペンスキー5種目を制した伝説的スキーヤーで、キッツビュエルでの滑降を征したのは1985年。この後、スキーワールドカップタイトルを4度手にし、1988年のオリンピックでは滑降で金メダルを獲得。さらにワールドカップでも9個のメダルを獲得した。だが、1985年のツルブリッゲンはこのハネンカムレースでの優勝にだけ集中していた。当時の「ザ・レース」は、金曜日と土曜日の2回のランに分けられていた。ツルブリッゲンは2回目のランで膝を痛めてしまい、ゴールエリアから救急車で搬送されてしまった。ワールドカップ史上ウィナー不在の表彰式を行ったのはこのときだけだった。

もう一人の抜きでたスキーヤーに、ロレックスのテストimoniーで、カリスマ性と真の勇気を備えた男、ヘルマン・マイヤーがいる。

マイヤーが世界的な注目を集めるようになったのは、1988年の長野オリンピックの滑降で大クラッシュに遭いながらも、スーパーGと大回転で金メダルを取得してからだった。だが、ヘルマン・マイヤーの人生で最大の成功は、2001年8月のオートバイでの大事故から驚異的な回復力で2002年に現役復帰したことだった。

マイヤーはオリンピックと世界選手権で10個のメダルを獲得し、ワールドカップで54勝を挙げた。ワールドカップでは、総合で4回、滑降で2回、スーパーGで5回、大回転で3回チャンピオンになっている。「ハーミネーター」の異名を持つマイヤーの伝説は、このキッツビュエルで醸成された。とくにスーパーGでは、7回参戦して優勝5回と2位1回という、史上最高の記録を達成した。ここ数年キッツビュエルでは、金曜日のスーパーGはヘルマン・マイヤーと同義語のように語られ、週末を通して最も大きな声援がマイヤーに注がれるのが習わしになっていた。

2009年秋、ヘルマン・マイヤーは現役引退を発表したが、ロレックスのテストimoniーとしてハネンカムレースとは密接なかかわりを続けていく。

マイヤーは、たぐいまれな強さ、アグレッシブさ、リスクを恐れない姿勢で成功を収めたが、キッツビュエルの1967年の滑降ウィナーだったジャン＝クロード・キリーはマイヤーとは真逆のスキーヤーだった。キリーは、エレガントで、正確で、コースに対して繊細な感覚を備えたレースぶりだった。キリーは1968年のグルノーブルオリンピックで、アルペン3種目（滑降、大回転、回転）で金メダルを独占。24歳の若さで現役を引退した。キリーは1992年のアルベールヴィルオリンピックの大会組織委員長を務め、現在は国際オリンピック連盟の上級役員を務めている。

マイヤーとキリーという対照的なスタイルから考えると、この難しいスロープに対する「理想的なレーサー像」はないということがわかる。すると、今年のハーネンカムレースに誰が優勝をするかを予測するのは不可能と思われる。だが反面、唯一確かなこともある。それは、最高のものがキッツビュエルの表彰台のトップにあがれるということだ。

ウィナーたちはここキッツビュエルの伝統を楽しみにやってくる。それは、スキーヤーたちをハーネンカムまで運ぶリフトのゴンドラにウィナーの名前を付けるならわしがあるからだ。これはハーネンカムレースのウィナーたちだけに許された栄誉である。2003年、ダロン・ラルヴスは世界選手権参加中にもかかわらず時間を割いてゴンドラの命名式に参加した。個人の名前のついたゴンドラは1基だけなので、特定の名前のゴンドラがやってくるまで20分待つことになる。マルコ・ビュヘルは2008年に優勝したが、自分のゴンドラが来るのを待ち切れなかった。一方、ヘルマン・マイヤーは、待ち時間がかかってもレース期間中はかならず自分の名前のゴンドラに乗ると噂されている。

シュトライフで勝つかギ

マイヤーのようなパワー型でも、キリーのような緻密なテクニク型でも、滑降コースのシュトライフで勝つにはその両方の資質を備えている必要がある。スタートから100mいくと、マウスファレ（マウストラップ＝ネズミのワナ）という地点に達する。ここは斜度85度で、斜面を60m近く飛びながら下る。着地と同時に、強い衝撃に耐えながら次の左コーナーへ向かう。10秒足らずで、世界一恐れられている区間のひとつシュタイルハングに備えることになる。そこは氷の層になっていて、スキーと斜面とスキーヤーの体力との戦いとなる。この区間を飛び抜けると、ブリュッケンシュッスへ向う。ここは一瞬の気の緩みでセイフティフェンスに突っ込むことになる。

アルテシュナイゼ、ザイドルアルム、レルヒェンシュッスと通過した後、ハウスベルクカンテ手前のジャンピングスポットに達する。ここでは、40,000人の大観衆が初めてスキーヤーを直接目にして歓声をあげるところである。一方、フィニッシュエリアでは、ファンたちはロレックスの大モニターで、スキーヤーたちのスタートからの映像と、最高スピードも観ることができる。

ジャンピングスポットで着地して、トラヴァースを超えるデリケートな左コーナーを通過すると、スキーヤーたちはほとんど減速せずにフィニッシュへ向かうコーナーへと進入する。スピードは時速約150kmに達する。そのまま、悪名高いフィニッシュジャンプで雪と氷を振り落とす。このジャンプのあとゴールへ向けて最後のスパートが待っている。そして、観客とスキーヤーたちの情熱がひとつとなったクライマックスのゴールとなる。クリスティアン・ゲディーナがスプレッドイーグルジャンプをし、奇跡的に着地してゴールした光景は、スキー史上に残る名シーンになっている。

フィニッシュした直後、スキーヤーたちはタイムに目をやる。その瞬間、フィニッシュエリアの歓声と声援は静寂となる。そして、スキーヤーたちのリアクションが全てを物語る。歓喜か、落胆か。勝利と敗北のわかれ目はわずか千分の一秒。ミスは許されない。ランは完璧でなければならない。これがキッツビュエルのチャンレジであり、ベスト・オブ・ザ・ベスト — 最高の選手しかハーネンカムレースには勝てないゆえんである。

「ザ・レース」の変遷

ハーネンカムを下る第1回目のレースは1931年に行われ、それはつましいイベントだった。だが、年を経るごとに「ザ・レース」は巨大なイベントへと進化していった。

大会の主催者であるキッツビューエル・スキー・クラブの専門知識と経験に、ORF（オーストリア国営放送局）の優れた中継によって、毎年完璧なショーが展開され、世界中で五億人を超える視聴者を数えるほどになっている。VIP客はグランドスタンドで毛布にくるまって観戦するが、エンスージアストな観客はコース脇に陣どり、毎年レースの雰囲気盛り上げている。なかには、最高の立見席を確保するためにスタートの3時間も前から場所取りをしている人もいる。

世界中のスキーレースで、ここほどメディアとプレスを集めるイベントはない。世界中の有名新聞、雑誌、テレビ局から記者やスタッフが集まってくる。そのなかには、スキーイベントの取材経験もないものも多い。期間中、メディア専用通路はとりわけエキサイティングな場所になる。ここほどレースのウィナーに話しかけるのが難しいところは他になく、ここほどウィナーになるのが難しいところも他にはない。

毎年1,000を超えるメディアがこのイベントに集まり、ファン、選手、応援で鳴らされるカウベルとともに、アルプスで名高いイベントの雰囲気を作り出す。1レースでも取材すれば、キッツビューエルの「ザ・レース」の実態が理解できるだろう。それは、人間がより速く滑り下ることで山に挑むことである。毎年1月に、さまざま経歴、国籍、年齢の人々が、比類なきスペクタクル、世界最大のイベントのひとつを見に集まってくる。このイベントは魅力的で、レースひとつひとつが独特である。ハーネンカムレースでは、慣れたり飽きたりすることはできないのである。

2010年大会にお越しになれないときは、下記サイトにお越しください。大会に関する情報や、プレスリリース、競技や雰囲気を伝える画像などのマルチメディア素材も提供しております。www.hahnenkammnews.com



大会プログラム

ハーネンカムレース キッツビュエル2010

1月19日 (火曜日)

11:30 滑降トレーニング1回目

1月20日 (水曜日)

11:30 滑降トレーニング2回目

14:00 ハーネンカム・ジュニアレース

1月21日 (木曜日)

11:30 滑降トレーニング3回目

1月22日 (金曜日)

11:30 ハーネンカム スーパーG

18:30 ハーネンカム スーパーG表彰式

18:45 ハーネンカム滑降のスタート順抽選会：Zielhaus (フィニッシュビルディング) にて

1月23日 (土曜日)

11:30 ハーネンカム滑降 続いて

レース後 "キッツ・チャリティトロフィー" "Ramuslitnラーミスリーテン"

終了後 優勝会見：プレスセンターにて

18:30 ハーネンカム滑降表彰式 及び ハーネンカム回転のスタート順抽選会
：Zielhaus (フィニッシュビルディング) にて

1月24日 (日曜日)

10:30 ハーネンカム回転 1走目

13:45 ハーネンカム回転 2走目

レース後 ハーネンカム回転及びハーネンカム複合 表彰式回転競技フィニッシュエリア
にて

大会審査委員会によって、スケジュールは変更される可能性があります。

ロレックスとスポーツ

正確、防水、タフ。1926年以来、オイスターはパイオニアスピリットとともに歩んできた。急速に進化する社会と、レジャーがより重きをなすライフスタイルに適合しながら、ロレックスの腕時計オイスターは従来の懐中時計からその主役の座を引き継いでいった。

この腕時計は、スポーツの世界で品質を高めてきた。1927年に英国人女性メルセデス・グライツが英仏海峡を泳いで渡ったとき、ロレックス・オイスターを装着。このときロレックスの創始者ハンス・ヴィルスドルフは、見事な手腕を発揮した。ヴィルスドルフは、英国の新聞デイリーメールの第一面を買い取り、この快挙を世に知らしめたのだった。腕時計は10時間以上海水に浸かっていたにもかかわらず正確に時を刻み続け、その卓越した防水性能と丈夫さを証明してみせた。これで若き創業者だったヴィルスドルフは、「テストimoniー」キャンペーンを生み出した。以来、オイスターの進歩は当事新たなスポーツ分野であった航空、自動車レース、登山などにスポーツマンが挑むことと不可分のものとなった。1933年、スチュワート・ブラッカーがエベレスト（チョモランマ）上空を飛行。1947年チャック・イエーガーが人類初の音速突破。1935年、サー・マルコム・キャンベルがブルーバードで陸上車輛の速度記録、時速484kmを達成。1953年、サー・ジョン・ハント、サー・エドモンド・ヒラリー、テンジン・ノルゲイの登山隊がエベレスト初登頂に成功。これらの成功は、オイスターの高い品質が支えていた。

長い年月の間に、テストimoniープログラムにはさらに多くのスポーツ種目が加わった。今日、ロレックスは、アルペンスキーのキッツビューエル・ハーネンカムレースのほか、ゴルフ、ヨット、テニス、乗馬、自動車レースという五大スポーツに関わっている。これら全ての種目で、その競技者たちにはこの正確さと耐久性の限界を極めることが求められる。

ロレックスについて

ロレックスは、スイスを時計産業のリーダーとして世界に知られ、その卓越した品質とノウハウで高い評判を得ている。

ロレックスの誕生

ロレックスの起源は、20世紀の始まりまでさかのぼる。まだ懐中時計が一般的だった時代に、バイエルン出身で24歳だったハンス・ヴィルスドルフは腕時計に未来を託した。この創業者のパイオニア精神は、現代に続く時計作りの歴史のなかでいくつもの成功の源泉となり、次の二つの発明のともなった。1926年、ロレックスは初の防水防塵時計のオイスターを発明。1931年にはパーペチュアルローターによる自動巻きメカニズムを搭載。以後、ロレックスは強いアイデンティティと固有の特徴を備えたオイスター腕時計のラインナップを創り続けている。人目でそれとわかる個性をもつロレックスのコレクションは170モデルを数え、その組み合わせは3,200種以上にもなる。さらにチェリーニコレクションが加わり、伝説的なロレックスの品質を愛するユーザーにとって更なる選択の幅が広がることになった。ロレックスは、その信頼性と性能でワールドワイドに高い評価を得ている。

国際企業

現在、ロレックスはブルーノ・マイヤーのもとで100カ国あまりに展開している。ロレックスは、28の支社と数千ものロレックス正規販売店を通して、時計とともに高いサービスクオリティも提供している。

ロレックスの腕時計は長持ちするように作られている。手作業による組み立てには、ロレックスの多年に渡って積み上げてきた経験とノウハウが活かされている。このジャンルでは唯一のアフターセールスサービスによって、ロレックスの腕時計は時を越えた正確さを保っている。これは、ロレックスで訓練を受けた時計職人4,000人以上が、世界中の支社や正規販売店に配置されることで達成されている。ユニバーサルで時を越えたブランドとして、ロレックスは新たなマーケットを開拓し続け、ワールドワイドに拡大している。

最新のテクノロジー

増大する需要に応じながら最新のテクノロジーも採り入れるために、ロレックスは生産にコンスタントな進化を導入してきた。1990年代なかばには縦型の生産設備を導入し、全ての製品の品質管理と独自性を確保するようになった。一貫性と効率を追求すべく、ロレックスは全ての部門をスイス国内の4つの拠点に集約もしている。

ジュネーヴ

ジュネーヴのロレックスの本社は、本社機能のほかに、時計の最終組み立て、販売、アフターセールスサービスを受け持っている。ジュネーヴ・シェーヌ・ブールは、ダイヤルや宝飾部分の開発と製造を担当。プランレワットでは、ケースとブレスレットの開発、製造、品質管理に関すること全てを担当している。

ビエンヌ

ビエンヌでは、ムーブメントの製造開発に関する製造と組み立てに関する全てを担当している。

卓越したイメージ

ロレックスの名は、性能と同義語である。1927年に英国人女性スイマーのメルセデス・グライツは、オイスターを装着したまま10時間あまりで英仏海峡を泳ぎきった。泳ぎ終わったときもオイスターは完璧に機能していた。ロレックスはすぐにデイリーメール紙に広告を打ち、防水時計の成功と“ロレックス・オイスターの世界への広がり”を高らかにうたった。この出来事は、ロレックスと、芸術やスポーツの分野で卓越した人々のなかでロレックスの腕時計の優秀性を認めた人々との長いつながりの始まりとなった。この卓越した人々をロレックス・テストimoniという。このロレックス・テストimoniの活動では、芸術、テニス、ゴルフ、ヨット、乗馬、モータースポーツにおいて、数多くのパートナーシップやスポンサー活動を展開している。



メディア・コンタクト

Marc Schlüssel (マルク・シュルツェル) : 国際メディア担当

Key Partners (KPMS)
20, Av. Edouard Dubois
CH - 2000 Neuchâtel
Switzerland

Tel: +41 32 724 28 29
Fax: +41 32 724 28 33
Mobile: +41 79 445 68 63

Email: info@hahnenkammnews.com

www.hahnenkammnews.com

ロレックスとスポーツ活動全般に関しては、こちらを参照ください。
www.rolex.com

ロレックスのスキーに関する活動は、こちらをご参照ください。
www.hahnenkammnews.com

